

(児童数配布)



1年生が七夕飾りを作りました！

7月7日は七夕です。これに向け1年生の子どもたちが七夕飾りを作りました。笹の枝には、子どもたちの願い事を書いた色紙をつるしてあるのですが、何を書いているのだろうと見てみると、ホッとするようなことを書いている子が多いのに感心しました。

- 「1ねんせいぜんいん なかよくなれますように」
- 「かぞくとずっとくらせますように」
- 「ころながおさまりますように」
- 「ともだちをたくさんつくれますように」
- 「よのなかがしあわせになりますように」

他にもたくさんありました。

テレビや新聞では、毎日、戦争の報道がされています。かつての世界中を巻き込んだ戦争を再び繰り返さないようにと、当時の人々はしっかり反省をし、それが今にも引き継がれているはず。ところが、未だに大人どうしが殺し合いや威嚇に何らかの理由をつけ正当化しようとしています。その大人たちに、子どもたちのこんな純粋な思いを届けたいですね。



「学力」とは？

よく言われる「学力」とはいったい何のことでしょうか？ただ単にテストの点数さえアップすれば学力がついたと思っていいのでしょうか。考えてみましょう。

2年生の算数では九九を学習します。日本では「9×9」（合計81個）までの答えを暗記することになっていますが、世界に目を広げてみると、様々な実情があることがわかります。

例えば英語圏であれば、「12×12」（合計144個）まで覚えることになっています。インドはもっと多いです。「20×20」（合計400個）までを暗記するのが一般的で、場所によっては99の段まで覚えるところもあるようです。99の段まで覚えるとなると計算上は9801個ですので、「これ、本当に覚えるの？」とも思えてしまいますが、さすがに計算は格段に早くなるようです。

逆に、日本で言う九九の類（たぐい）を重視しない国もあります。学力世界一と言

われるフィンランドです。フィンランドでは、「九九を覚えるくらいなら電卓を使いましょう。」だそうです。私はこの考え方に賛成できるところもあります。

理由として、九九は答えを導き出すためのあくまでもツールであって、肝心なのは、立式ができるかということだからです。これはわり算についても同じです。大切なのはただ単に計算ができるのではなく、式の意味が分かっていることです。これができてこそ、初めて学力がついたということになります。

似たようなことは他にもあります。今は誰もがスマホを持っています。うろ覚えのことも、スマホさえ開けば調べることができます。「知っている」ことにそれほど価値がなくなっているのです。これからの時代は「知っている」よりも「適切に使える」「考えられる」「応用できる」などの力が求められます。以前にもこの紙面で述べましたが、6年生が取り組む全国学力テストでも、ただ単に知識の量を測るのではなく、示された情報をどのように使えるかが試されています。いわゆる「情報活用能力」です。「学力」については、様々な議論があるのですが、私はこういう力も「学力」の大きな柱として考えています。

※「学力」については、今後もこの紙面に掲載していきたいと思えます。

◇生活指導の先生より



きれいにそろえています。



これはこまりますね。

この写真を見比べてください。どちらのスリッパがはきやすいでしょうか。もちろん左の方がはきやすいといえるでしょう。

この写真はある日の緑地小学校のトイレスリッパです。スリッパの様子を観察していると右の写真のようにちらばっている時もあるれば、左の写真のようにきれいにそろっている時もあります。左のようにそろっているということは、だれかがそろえてくれているのです。中には、自分のはいたスリッパだけではないものまでそろえてくれる人もいます。そんな姿を見た時、感心しましたし、とてもいい気持ちになりました。

緑地小全員で使いやすく、気持ちの良いトイレを目指してそろえるようにしましょう。